



# 支えられた私

静岡県代表

しずおかけんまきの はらしりつさがら  
静岡県牧之原市立相良中学校 3年

たきや みき  
瀧谷 美紀

私は生まれつき、2,000人に1人という脊椎の病気を持っています。症状が重いと、歩けなかったり、立ち上がれなかったりすることもあるような病気で、私も小さい頃には入院や手術を何度かしました。

特に、6才、7才のときの入院では、家族や友達としばらく離れて生活することになり、始め、すごく不安を感じていたのを覚えています。でも、入院中は、母が片道約1時間かかる道のりを、毎日病院に通って来てくれました。小学校の担任の先生も、たまに様子を見にお見舞に来てくれました。学校の友達や、近所の知り合いの方々からの励ましの手紙も、とても嬉しかったです。

それに、私が入院中寂しい思いをしなかったのは、一緒に入院していた病院での友達のお陰だし、今、毎日元気に過ごせているのは、お医者さんや看護師さんの治療のお陰です。入院中、私はいろいろな立場の人に支えられていたからこそ、安心して生活できたのだと思います。

こうして支障なく日常生活を送ることができるようになった私ですが、1つだけ心の晴れないことがありました。それは、背中と足に残った手術の跡です。特に足に残った傷跡は、友達目にふれることも多く、必要以上に気になりました。中学校に入学すると、自分の足を「恥ずかしい」と思う気持ちはさらに強くなり、水泳の授業など、裸足にならないといけなときには、周りの子の足を見るたびに劣等感を抱いて、いつもできるだけ足を隠していました。でも、そんな私を見て、たくさんの友達が「大丈夫？」と声をかけてくれたし、先生方も、私の学校生活などいろいろと気遣ってくださいました。そして母が、手術の傷跡は自分が病気と向き合い、頑張ってきた証拠なんだから、恥

じるようなことではなく、むしろ誇れることなんだと教えてくれました。たくさんの人の優しさに触れ、母のその言葉を聞いて、とても気持ちが楽になりました。このことについても、私はいろいろな人に支えられているんだということを実感することができました。

「支える」にはいろいろな形があります。温かい言葉をかけることや、気の利いた手助けをすることはもちろんですが、相手によっては何もしないで笑顔で見守ったり、じっと待たせたりすることも支えることになるのではないかと考えます。大切なことは、単にその人が感じている悩み、苦しみを一時的に取り除くのではないということです。「困っているから力を貸して助けてあげる。」というのでもありません。もし、幼いころの私が、病気を理由に身の回りのことをすべてやってもらっていたら、きっと今よりもずいぶん甘ったれた人間になっていたでしょう。それよりも、つらい治療に耐えた自分を、さりげなくほめてくれる言葉に何度も勇気づけられたことを、今でも覚えています。そうしたうれしい経験があったからこそ、病気を乗り越えた今の自分があるのです。思うに、「支える」とは、「光で照らして、その人が歩むべき道を一緒に探し歩く」ということではないでしょうか。今だけではなく、その人の将来まで考えたとき、横にいる人が最適な言葉や行動でサポートする。これが本当の「支える」ことだと思います。

これまで私たちは多くの方々を支えられて生きてきました。そして、今も毎日誰かに支えられて生きています。そろそろ私たちも、誰かを支えるときが来ているのではないのでしょうか。身の回りを見渡して、そっと寄り添い、支えられる人になろうではありませんか。